

## 研 修 報 告 書

以下のとおり視察の報告をいたします。

### 1 会派名及び視察者名

会 派：青雲

視察者：川内賢幸

### 2 視察先・テーマ及び日時

「官民・官学で取り組む次世代へ繋ぐプラットフォームづくり」

◎令和 7 年 2 月 4 日（火） 14 時 00 分～16 時 00 分

研修先：佐賀県佐賀市 SAGA プラザ研修室

研修内容：「地方から世界へ羽ばたくアスリートを～SAGA スポーツピラミッド構想～」

佐賀県町「SSP2024・SSP 推進局 SSP 統括官」 日野稔邦氏

### 3 研修の内容

佐賀国民スポーツ大会・障がい者スポーツ大会をひつの契機として、2018 年にスタートした佐賀スポーツピラミッド構想（通称 SSP）。

### 4 研修の感想

佐賀スポーツピラミッド構想は、スポーツを楽しむ→全国大会出場候補→日本トップ級候補 SSP ホープアスリート（中 1～）→日本トップ級 SSP ライジングアスリート（高 2～）→世界 SSP トップアスリートからなるピラミッドをイメージして取組を進めているもの。「スポーツを楽しむ」という観点から、すそ野をどんどん広げて巻き込んでいくことを念頭に「くめるところとはどんどん組んでいく」スタイルをとっている。失敗を恐れず、関係が少しでもああれば SSP に巻き込んでいる。

根底にある考えとして、東京や大阪などの大都会では起こりにくいシビックプライドを子どものうちから涵養していくことであり、必要な「地元への自己肯定感を上げること、夢や誇りを子どもたちへ抱かせること」も考えの一つに組み込まれている。

また、SSP のわかりやすい面として「佐賀から世界へ」というスローガンがイメージしやすく取り組みやすい点も考慮されていた。

国民スポーツ大会へ名称が変わってから初めての大会が SAGA 国スポであった。最近では、国体不要論が出ているが、その背景として「我が県に重きを置きすぎており、ターゲット世代にのみ多くの予算がつぎ込まれており、結果として最大瞬間風速で終わってしまい、ターゲット世代から漏

れた選手や県民には恩恵がない」という一面が分析されていた。

佐賀県では、国体のその先の在り方を明確にするために **SSP** 構想を立ち上げており、「スポーツをする」ことだけにフォーカスするのではなく、「見る」「支える」「育てる」視点を持って取り組むことが大事との視点で取り組んでいた。

欧米などで実施されているスポーツビジネスになぞらえて、学校では稼ぐ概念がないことから「審判や指導者」について、謝金を賃金を設定して取り組んでいくべきとの考えも示された。

取り組み事例として、県立高校での量不足問題に県が主体的に取り組んでおり、九州電力の社員寮を高校生の寮として利用する、久光製薬などの民間企業との連携を通じて民間の遊休資源を活用する取り組みを行っていた。

選手たちを育成するうえで、各県立高校ごとに尖らせる取組を進めており、例えばレスリングやクライミングに特化した高校を作っていくこと県が率先して行っていた。

国民スポーツ大会。障がい者スポーツ大会の開催が目的ではなく、大型施設をスポーツを通じてどうやって行くかしていくかという点にも触れられた。

事例として佐賀アリーナの活用が紹介され、ミュージシャンなどのコンサートを実施するなど「見て楽しむ」をコンセプトに幅広く活用されていた。スポーツ×スポーツではなく、「スポーツ×○○」という視点で施設活用を考えていることに、県の政策の自由度を感じた。

## ◎成果及び市政への反映

都城では、令和 9 年の国民スポーツ大会・障がい者スポーツ大会に向けた取り組みが本格化していく時期に入った。ゴールデンエイジ、ターゲットエイジに焦点を当てた取り組みを 2 巡目国体決定以降続けているが、単発ではなく継続的にスポーツに親しむ環境を総合的に構築していく必要性を感じた。

宮崎県では、野球の宮崎サンシャインズやサッカーのテゲバジャーロ宮崎といったローカルチームが頑張っている。本市では、読売ジャイアンツや千葉ロッテマリーンズ、横浜 FC、アルビレックス新潟などのプロチームもキャンプに来ており、これらと市民をいかに掛け合わせて将来的な活動、活性化につなげていけるかが重要である。つまりは、「市がやっている」から「市民をあげて取り組んでいる」に変えていく必要がある。この点は、本市の多くの政策にも言えることであり、非常に重要な視点だと考える。

佐賀県が主体となって行っている **SSP** 構想のようにはいかないが、都城市としてソフト面の独自性と将来ビジョンを示していくことは非常に重要であり、各競技団体の連携を密に図っていくことはもちろん、子どもたちにスポーツの様々な楽しみ方「プレー」「観戦」「サポート」などを感じてもらい取り組みも重要であると考えます。

また、クロキスタジアムやアカキリフィールドを国スポ以降も 120%活用し行くためには、スポーツばかりではなく、「スポーツ×○○」の視点で大いに利活用していくことが求められており、そのことが、地域の活性化にも活かしていけるものと考えます。

宮崎国スポ・障スポまでを見るとあと 2 年程度のことで終わってしまうが、上記の視点を持って取り組むことで 20 年ビジョン、30 年ビジョンといった長期ビジョンが生まれてくる。今後の政策提言や調査においてもこの視点を持ちながら本市の総合的なスポーツビジョン形成に取り組んでいく。



